

大学生における抑うつ症状を呈する友人への専門的な心理援助の利用勧奨に関する研究 —専門的援助への態度、偏見、過去の体験に着目して—

中 村 和 音

抑うつ症状などメンタルヘルスの不調をきたす大学生は増加傾向であるものの、そのうち精神科・心療内科といった医療機関や学生相談などの専門的な心理援助を利用する者は少ないのが現状である。専門的な心理援助を利用した学生には、家族や友人から利用を勧められた者が多く、そういった家族や友人などのインフォーマルな援助資源を活かしながら、メンタルヘルスの不調をきたす学生をいかに専門的な心理援助につなげるかが課題となっている。

本研究の目的は、抑うつ症状を呈する友人に対する援助的な初期対応の方略の1つである専門的な心理援助の利用勧奨に焦点を当て、利用を勧める側である援助者自身の過去の抑うつ体験、専門的な心理援助を要請することに対する態度、心理援助を受けることへ偏見（スティグマ）との関連を検討することであった。大学生390名を（有効回答者239名）対象に、過去の抑うつ体験、専門的な心理援助を要請することに対する態度、心理援助を受けることへ偏見についての質問紙調査を実施した。その結果、専門的な心理援助を求める態度は専門的援助の利用勧奨意図との間に有意な正の関連を、専門的な心理援助を求める態度と専門的な心理援助の利用勧奨意図との関連における、心理援助を受けることへの偏見の調整効果が示された。これらの結果から、専門的な心理援助を求める態度は、自らがメンタルヘルスの不調をきたした際のみならず、援助者となった際に専門的な心理援助の利用を勧める意図にも影響すること、心理援助を受けることへの偏見が専門的な心理援助を求める態度を否定的にし、それにより専門的な心理援助の利用勧奨意図が低下することが示唆された。